

論文審査の結果の要旨および担当者

報告番号	※	甲	第	号
------	---	---	---	---

氏 名 山本貴之

論文題目

Kidney Volume Changes in Patients With Autosomal
Dominant Polycystic Kidney Disease
After Renal Transplantation

(常染色体優性遺伝多発性嚢胞腎患者の腎移植後の腎容積変化)

論文審査担当者

名古屋大学教授

主査委員

後藤 百 万 

名古屋大学教授

委員

門松 健治 

名古屋大学教授

委員

松尾 清一 

名古屋大学教授

指導教授

小寺 泰弘 

論文審査の結果の要旨






ADPKD を原疾患とした患者に腎移植を施行した後この嚢胞腎及び肝嚢胞の容積がどのような経過をたどるか検討した報告は殆どない。今回我々は、単純 CT を用いて移植後の嚢胞腎及び肝嚢胞の容積変化について検討を行った。ADPKD を原疾患として腎移植を施行し CT で容積変化の解析が可能であった 33 例を対象とした。33 例中肝嚢胞合併症例は 18 例ありこれらの移植後の容積変化を検討した。容積変化率は、嚢胞腎は移植後 3 年で 40.6% の有意な縮小 ($p < 0.001$) を認めたが、肝嚢胞は 21.4% と有意な増大 ($p < 0.01$) を認めた。嚢胞腎は腎移植により容積は有意に縮小するため移植できるスペースを確保できるなら嚢胞腎摘出を施行する必要がないことが示唆された。但し、肝嚢胞合併症例では移植後も肝嚢胞は増大するため移植後の経過に注意を要すると考えられた。

本研究の新知見と意義は要約すると以下のとおりである。

1. 嚢胞腎は腎移植後、実質が概ね退縮していることもありその主を占める嚢胞が腎移植後利尿が付き余分な体液が体外へ排出することに随伴し縮小することにより嚢胞腎が縮小すると考えられる。これは MRI を用いた他の文献的考察からも推察される。
2. 嚢胞腎は移植後縮小することが本研究から明らかになったが肝嚢胞は増大を認める。現状、この肝嚢胞を縮小させる戦略についての報告はシロリムスを用いた小規模の観察研究のみである。現在保存期多発性嚢胞腎を縮小させる戦略としてエベロリムス、ソマトスタチンアナログ、tolvaptan 使用が報告されているが、腎移植後免疫抑制剤を使用し薬物相互作用が重要であることを考慮すると免疫抑制剤としても使用されているエベロリムスの使用が腎移植後嚢胞腎だけでなく嚢胞肝も縮小させる戦略として期待される。
3. シクロスポリンとタクロリムスで嚢胞腎の縮小の程度に違いはなく他の代謝拮抗剤の違いによっても嚢胞腎の縮小に違いは認められなかった。

以上の理由により、本研究は博士（医学）の学位を授与するに相応しい価値を有するものと評価した。

試験の結果の要旨および担当者

報告番号	※甲第	号	氏名	山本貴之
試験担当者	主査 後藤百子 指導教授 小寺泰弘     			
<p>(試験の結果の要旨)</p> <p>主論文についてその内容を詳細に検討し、次の問題について試験を実施した。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 腎移植後嚢胞腎が縮小する機序について 2. 腎移植後嚢胞腎だけでなく嚢胞肝の縮小も考慮した現状と展望について 3. 腎移植後嚢胞腎の縮小と免疫抑制剤の関連について <p>以上の試験の結果、本人は深い学識と判断力ならびに考察力を有するとともに、消化器外科学一般における知識も十分具備していることを認め、学位審査委員合議の上、合格と判断した。</p>				